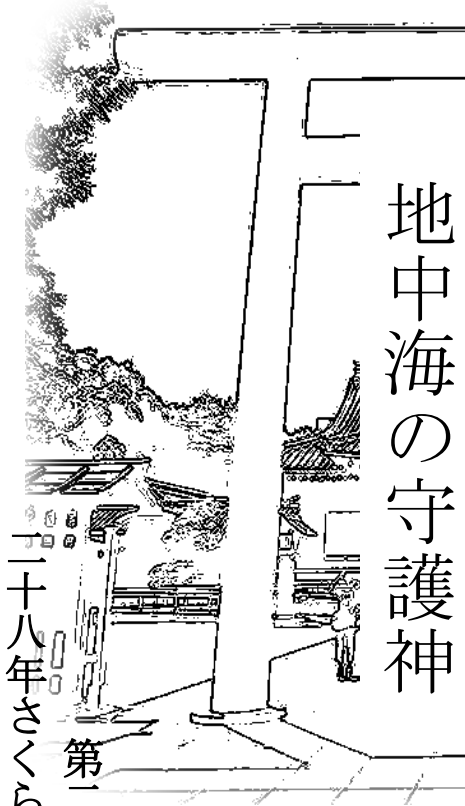


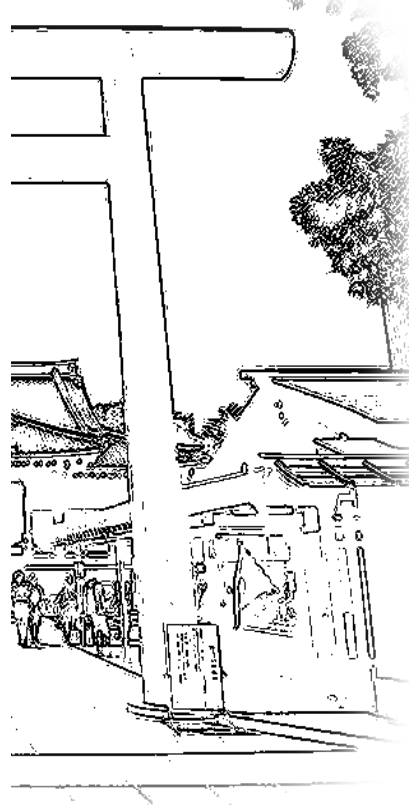
平成二十八年さくら祭

ご英霊の思いに込めるために

地中海の守護神



二十八年さくら祭
第二版



靖国神社

「地中海の守護神」と言われて、多くの人は、何のことか理解できないと思います。それも其のはず、日本は、先の大東亜戦争での敗戦の結果アメリカの仕掛けたウオー・ギルト・インフォームーションプログラム（戦争についての罪悪感を日本人の心に植えつけるための宣伝計画）により、日本の近代史の多くが消されているからです。

チェコ出身の作家ミラン・クンデラは次のように語っています。

「一国の人々を抹殺するための最初の段階は、その記憶を失わせることである。その国民の図書、その文化、その歴史を消し去った上で、誰かに新しい本を書かせ、新しい文化をつくらせて新しい歴史を発明することだ。そうすれば間もなく、その国民は、国の現状についてもその過去についても忘れ始めることになるだろう」

まさしく、アメリカの占領軍である GHQ が日本で行ったことである。相手の国を滅ぼすには武器は必要ない、その国の歴史を消し去ればいい。マッカーサーは、日本統治に際してこう命令した。

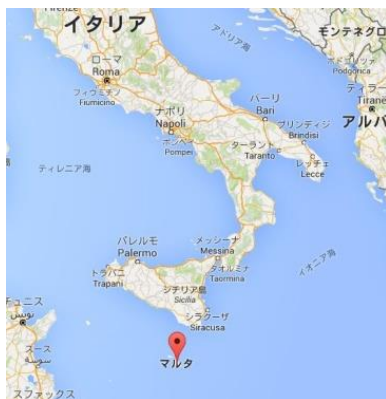
「この民族は、終身、歴史を教えてはならない」そして日本の学校から、国史の授業が消えた。そして戦後七〇年、日本人が忘れてはならない今蘇る英霊のその足跡。

地中海にあるマルタ島。そのカルカラーの丘の英海軍基地の一隅に、「大日本帝国第二特務艦隊戦死者之墓」が建っています。なぜこんな遠くの地に、しかも墓碑までもが建てられたのでしょうか。

それは今を遡ること百年。時は第一次世界大戦にさかのぼります。大戦下一九一七年、マルタ島（当時英国領）はドイツの潜水艦によって海上封鎖状態になり、生活物資にも不足をきたしました。そこで英国が同盟国の日本に支援を求め、日本は巡洋艦「明石」を旗艦とする八隻の艦隊を地中海に派遣。

この戦闘で駆逐艦「^{さかき}榊」が魚雷の直撃を受けて大破、乗組員五九名が戦死しました。

第一次世界大戦はセルビア青年がオーストリア皇太子夫妻を暗殺したサラエボ事件に端を発した欧州戦争です。



地中海 マルタ島

オーストリアの同盟国はドイツなど。これに対しセルビア側にはロシア、フランス、イギリス、イタリア、アメリカ、日本などの連合国が対峙しました。

この第一次世界大戦でドイツはヨーロッパ戦線が膠着していたため、ドイツは地中海で潜水艦「ボート」による無差別攻撃を決行しました。そのため兵員などを輸送する連合国の船舶被害は激増。これに音をあげたイギリスは同盟国でもある日本に派遣を要請したのです。

我が国には大戦当初、支那の青島やマリアナ諸島方面に展開するドイツ海軍に対する作戦もあり、艦艇を地中海に派遣する余裕はありませんでしたが、連合国の輸送船を護衛するために、巡洋艦「明石」と駆逐艦八隻からなる第二特務艦隊を地中海に派遣することにしました。

日本の艦隊が現地到着した頃には連合国の艦船被害は甚大であったため、帝国海軍は太平洋から地中海へと長期行動であるにもかかわらず休養もなまま直ちに護衛任務を要請されました。

船舶の護衛とともに被害を受けた艦船の救助活動も重要な任務でした。しかも戦闘中の救助作業は自らを危険にさらすことでもあり容易なことではありません。

大正六年五月、我が帝国海軍の「榊」、「松」の駆逐艦二隻は、魚雷攻撃を受け沈没していく兵員輸送船「トランシルバニア号」の救援に駆けつけて、敵の潜水艦の目前で、しかも敵と戦闘しながら、なんと乗員約三千名を救助しました。これは奇跡ともいわれるくらい常識破りの行為であり、帰港したイタリア・サボナでは帝国海軍の日本兵たちを英雄として大歓迎したのです。

また、大正七年、駆逐艦「桃」「檉」は、魚雷を受け自力で航行出来なくなった英船「パングラス号」を不眠不



マルタ島カルカーラの丘の英海軍墓地にある大日本帝国第二特務艦隊戦死者の墓

休三日三晩戦闘しながら、しかも潜水艦に襲撃される危険も恐れずに同船を曳航してマルタに無事着岸させたのです。この快挙にマルタの町は感極まって港は歓迎の日の丸の旗で埋め尽くされたと言われています。

これらのことにより帝国海軍第二特務艦隊は大きな信頼を得て、輸送船の船長の多くは帝国海軍の護衛を望み、日本艦隊の護衛でなければ出港しないという船長が出るほどでした。

この奮戦振りにイギリスは我が日本帝国海軍の第二特務艦隊を「地中海の守護神」と称え、世界中からも称賛されました。これら帝国海軍の活躍に対し、イギリス国王は日本の将兵に勲章を授与し、何と英国議会では議会始まって以来、日本語で「バンザイ三唱」までもが行われたのです。

これらの任務の中で尊い犠牲もありました。任務中の駆逐艦「榊」が潜水艦の雷撃を受け大破し、艦長は海に投げ出され、五九名が帰らぬ人となり、他の戦闘と併せて七八名が命を落としました。この時の「榊」の艦長は山口県出身、鴻城義塾（今の鴻城高等学校の前身）から海軍兵学校に進んだ上原太一中佐です。

しかし、この第二次特務艦隊の荣誉と勇敢さが称えられ、大正七年にカルカーラの英海軍墓地内に大理石の墓碑が建立されました。これが前述のマルタ島にある「大日本帝国第二特務艦隊戦死者之墓」です。

大正十年四月、皇太子であられた昭和天皇が欧州ご訪問をなされましたが、まず真っ先に訪れられたのがこのマルタの地でした。そしてこの墓碑に花輪を供えて英霊を慰められたのです。

この時、マルタの地では日章旗と皇室の菊の御紋であふれかえったといわれています。

終戦後、マルタ島に訪れる日本人も少なく、この墓碑は長いあいだ廃れたままでした。昭和四六年二月、当時の自衛隊・海上幕僚長が訪欧でマルタに立ち寄った時、あまりに破損がひどいので、外務省と協議して再建することになり、昭和四八年に復元されたのです。そして除幕式はイタリア大使館主催で盛大に行われ、その墓碑が再建されたことをお聞きになられた昭和天皇は大変お喜びになられたそうです。

英国生まれのC・W・ニコルさんは以前こう書いています。

「八〇余年の時を経て今、海上自衛隊がインド洋に派遣されているが、派遣の是非を論じる前に世界が称賛したこんなに勇敢で誇り高い日本人が居たという事実をもっと学んで欲しい」と。

マルタの土となった英霊はいまも祖国日本には帰っていません。

英霊たちは、今の日本人は自分たちのことをすっかり忘れているのかもしれないと、

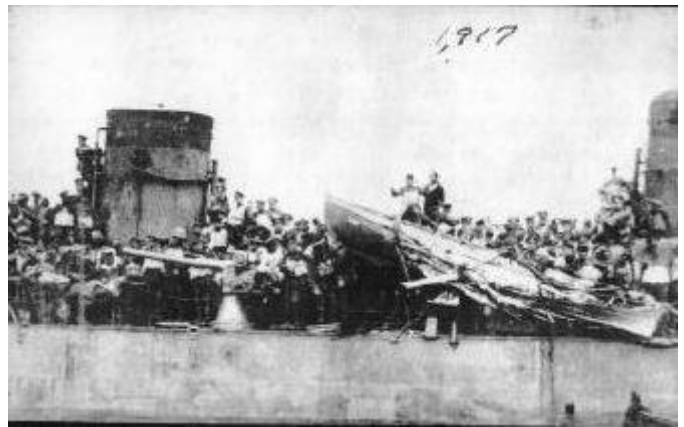
そういう思いだろうか・・・。

戦後七〇年を過ぎ世界は混沌としております。二〇〇八年のリーマンショックを境に米国は超大国の地位を失い、オバマ大統領は「米国は世界の警察官ではない」とまで言いました。そこに新たな覇権争いが始まり、その隙をぬうかのごとくシリアとイラクにわたってIS国が台頭してきました。

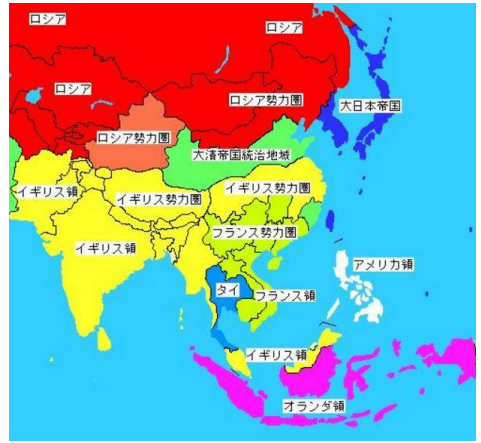
IS国は、ヨーロッパ列強が引いた国境線の書き換えを主張し、イスラムによるイスラムの國を打ち立てると過激な行動に出ています。

欧州西側諸国にはISによるテロが頻発、その報復として、シリア、イラクにまたがるIS国の支配地は西側諸国による空爆を受け、多くの難民が発生。西側諸国はテロは断固許さないとメッセージを発しております。

しかし歴史を学ぶに、あのシリアからイラクにかけてはイスラムの世界です。そこに西側、特に英、仏は石油の利権を確保するため、シリア、イラクに介入。シリア、イラクの国境は直線となっており、それは英、仏が勝手に引いた国境です。昨今起こる、パリ等でのテロは、過去の英、仏の力による支配に対する抵抗とも言えます。



駆逐艦「榊」がトランシルバニア号から英国兵員を救助する様子



アジアにおける大東亜戦争前の勢力図

祖国を守ろうとした歴史忘ることなく、日本の平和、世界の平和に叡智を傾けなければいけません。其の青神とは神道の中庸の精神に見いだせるのかもしれない。

そこには、敢然と歴史の事実が横たわっております。シリア、イラクにまたがる人々は其の歴史を忘れてはいません。ややもすると日本人は、戦後七〇年も過ぎ、英霊顕彰など不必要などとの声も聞こえます。しかし、先の大東亜戦争は、有色人種の台頭に対する白人の力による抑えこみの行動とも言えます。大東亜戦争前のアジアの地図を見て下さい。独立国は日本とタイのみです。

マスコミは、パリのテロに対して、パリでは「パリに平和を」と、市民の声を報道しております。しかし、シリアの都市も、フランスの空爆を受け、シリアの市民にも平和をと訴えるべきでしょう。

私どもは、歴史を学び、正しい歴史認識を持ち、ご英霊が命を投げうって

(二十八年さくら祭 授与品に同封)

万倉護国神社社務所

平成二八年四月

平成二九年追記

平成二九年六月、イタリアのタオルミーナでG20 サミットが開催されました。日本では伊勢サミットが平成二八年開催されました。その際、安倍首相は、本文で紹介した、旧日本海軍戦没者墓地を訪れ、地中海で活躍した、第二特務艦隊の戦没者の英霊に、花を手向けられました。

此処に総理のメッセージを記します。



旧日本海軍戦没者墓地を訪問、献花された安倍総理
夫妻(マルタ島にて)

「ムスカット首相との会談に先立ち、旧日本海軍戦没者墓地を訪問しました。そこで日本海軍が、一九一七年に日英同盟の下、マルタを拠点に地中海で活動した際の、七一名の戦没者の方を慰霊いたしました。同墓地には一九二一年に当時皇太子であられた昭和天皇も訪れ、戦没者を慰霊されています。百年前の地中海において、私たちの先人は、病院船を守り、沈没寸前の客船から多くの看護師を助けるなどして、大いなる尊敬を、英国を始めとする各国から勝ち得ました。私は、当時の先人の活躍に思いを馳せつつ、現代において、国際協調主義に基づく積極的平和主義の下、国際社会の平和と安定に一層貢献していく、その決意を新たにしました。」

歴代の総理で、このマルタの慰霊碑を訪問され慰霊されたのは安倍総理だけです。このマルタのカルカーナにある英国軍墓地人は非常に広く、その一番の見晴らしの良い所に日本帝国海軍墓地があります。

マルタでは「日本兵は勇壮な戦いをしてながら礼儀正しく謙虚だったので、上陸したときなどは非常に尊敬されたといわれている」と証言するのは、在マルタ日本名誉総領事のヒューバート・ミフスツドさん(六五)。父親の代からの名誉領事です。安倍総理は地球儀を俯瞰する外交と口にされていますが。過去散華された日本軍人の謂れある慰霊碑等にも訪問されており、これは大手の新聞には記事となっております。